第５回 横須賀市立高等学校教育改革検討委員会

■日　時　　平成 26 年（2014 年）３月７日（金）　13:30～15:35
■場　所　　横須賀市役所　３号館３階 302 会議室
■出席者　　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会委員（10 人）

委員長	安彦　忠彦	神奈川大学特別招聘教授、名古屋大学名誉教授
委員長職務代理	松本　敬之介	市立横須賀総合高等学校　学校評議委員
委員	小野寺　昌枝	市立横須賀総合高等学校　総括教諭
	小林　雅巳	市立横須賀総合高等学校　ＰＴＡ会長
	坂庭　修	市立横須賀総合高等学校　定時制教頭
	田中　靖和	市体育協会　理事長
	中山　俊史	市立横須賀総合高等学校　校長
	北條　文明	市民公募委員
	山岸　義之	市立横須賀総合高等学校　副校長
	吉田　和市	市立公郷中学校　校長
（欠席）	赤羽根　丈行	市ＰＴＡ協議会　会長
（欠席）	菊池　匡文	商工会議所　専務理事
（欠席）	下川　紀子	市立鶴久保小学校　校長
（欠席）	福田　敏人	県教育委員会教育局指導部高校教育企画課　課長
（欠席）	長井　興一郎	市民公募委員

事務局（６人）

教育政策担当課長　菱沼　孝
教育政策担当主査　栗野　真一
教育政策担当指導主事　河野　和代
教育政策担当指導主事　中川　幸太
教育政策担当指導主事　原口　尚延
教育政策担当　志村　洸哉（記録者）

傍聴者（１人）

【議　事】　１　横須賀市立高等学校の目指す学校像について
２　横須賀市立高等学校の目指す学校に求められる条件について
３　その他

■資　料

資料１　第４回「横須賀市立高等学校教育改革検討委員会」会議録
資料２　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会の経過報告
資料３　横須賀市立高等学校教育改革検討委員会の状況報告について
資料４　学校開放講座（オープンスクール）について
資料５　中高一貫教育校（県立中等教育学校）について
資料６　併設型中高一貫校について
資料７　横須賀総合高校での学び
資料８　横須賀総合高校　地域連携

■会議概要

安彦委員長

それでは、議事に入ります。今回は、前回作成した経過報告をもとに、「目指す学校像」について審議を深め、その後、「目指す学校に求められる条件」について、審議をしていきたいと思います。前回作成した経過報告等について、事務局から説明があるとのことなので、事務局より説明をお願いします。

事務局：教育政策担当　菱沼課長

前回、教育委員会と市長への説明のために、第４回までの審議経過をまとめていただきまして、ありがとうございました。先日、市長・副市長に、本日の資料２「経過報告」を説明いたしました。また、来週行われる「市議会・教育福祉常任委員会」に資料３「検討委員会の状況報告」ということで、説明いたします。議会には、審議の内容ではなく、このような形で進んでいるという状況説明をいたします。議会には、本検討委員会の審議に影響することのないようにということで、お話ししてまいりますので、ご了解ください。

委員長をはじめ委員の皆様には、日程の変更等いろいろなご心配とお手数をおかけいたしました。ありがとうございました。本日が本年度最後の検討委員会となりますが、前回もお話ししましたように、審議の状況によっては、次年度、２回ではなく、３回の開催をお願いすることとなるかもしれません。お忙しいこととは存じますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

安彦委員長

このことについて、何かご質問やご意見はありますか。
では、市長への経過報告の説明が終了し、来週、議会へ状況説明をするということですね。そして、次年度の開催回数を３回にすることがあり得ると、これは前回もお話いただいたと思いますけれども、そういうことでございます。よろしいでしょうか。

それでは、議事に入ります。会議資料について、事務局から確認をお願いいたします。

事務局：教育政策担当　河野

それでは会議資料について確認させていただきます。

事前に送付させていただきました資料１～６と本日追加させていただいた資料７，８がございます。また、追加資料分も修正しまして、次第も修正したものを配付させていただきました。差し替えをよろしくお願いします。

初めに、資料１ですが、20 ページの福田委員のご発言で上から３行目「教育参事官」とありますが、「官」の字を「監」に修正をお願いいたします。大変申し訳ございません。

続いて資料２ですが、前回の検討委員会でいただいたご意見をもとに、目指す学校像については、前回の「地域に根ざした学校」「創造性・社会性・キャリア意識の育成」「生徒の自主的な文化・スポーツ活動の促進」を（１）『生徒一人一人の自己実現を図り、キャリア意識を育成することのできる学校』に、そして、「自立した国際人の育成」「情報リテラシー」を（２）の『国際社会において活躍できる自立した国際人となることのできる学校』とまとめさせていただきました。その下には、具体的な内容が書いてございます。本日は、この文言についての加筆・修正をお願いできればと思います。また、「横須賀総合高校の現状と課題」について、ご指摘いただいた部分は若干修正いたしましたが、答申（案）を作成するにあたって、同様に加筆・修正についてご指摘いただきたいと思います。また、「目指す学校に求められる条件」についても、本日の審議の中で、ご意見をいただき、加筆・修正をしていかれればと思っております。よろしくお願いします。

資料３は、先程、課長より説明がありましたが、来週の議会への報告資料です。

資料４ですが、資料２の経過報告の目指す学校像の（１）の最後の所に「生涯学習機関として、その施設整備や人的資源を活用できる学校としての役割を果たすことを目指す。」ということで、検討委員会の中で「市立１校しかない高等学校として市民のニーズに対応して」というお話があったかと思います。この部分を検討いただく資料として準備をしました。生涯学習課が、昭和 60 年前後から、成人教育事業として実施しているものに「学校開放講座（オープンスクール）」というものがございます。当時は、中学校・高校の先生が講師となり、それぞれの学校の施設で、授業が展開され、市民の方が参加されたようです。現在も成人教育事業は継続されておりますが、予算が削減され、この「学校開放講座」については、平成 20 年度から廃止されております。こちらの資料に市立横須賀高校、市立商業高校、市立工業高校と、この当時は３校の先生方、その後平成 15 年からは受託生涯学習事業として、生涯学習センターへの委託事業としましたが、それについては、同じ時期に横須賀総合高校が開校しましたので、横須賀総合高校の先生方が担当されておりますが、平成 20 年度から廃止となっております。それと、現在の横須賀総合高校は、全日制、定時制があり、昼間も夜間も授業および、部活動でさまざまな施設が使われております。前に、高校からも説明があった通り、実際に高校の施設を外部の方が利用されるというのは、難しいと思います。生涯学習機関として書かせていただいておりますけれども、この辺り地域の学校というところも含めてご意見をいただければと準備をした資料でございます。

次に資料５についてです。前回、中高一貫教育校についてということで、県高校教育企画課長の福田委員からご提出いただいた資料ですが、本日、公務でご欠席ですので、代わりに事務局の方で、説明させていただきます。ご一読いただいたかと思いますが、県では、国において制度化された後、県立高校改革推進計画後期実施計画で、県立中等教育学校２校の開校を位置付け、全県的な地域バランスや横浜、川崎、横須賀の高校を設置している３市は独自の取組が可能なことなど、総合的に勘案して、平塚と相模原に開校することを

決定し、平成21年に開校され、現在に至っております。設置目的等は資料の２ページをご覧ください。Ａ３の３ページには、概要がのっております。幅広い教養と次世代を担う人材に必要な資質能力の育成、豊かな人間性とリーダーシップを育成ということでそれぞれ２校が独自の教育活動を展開されているということが書いてあります。５ページには、開校から次年度までの、入学者の募集に係る志願者数の推移がのっております。毎年７倍前後で推移しているようです。成果としては、中高一貫教育校ですので、入試を受けずに、３年３年で切れることなく、６年間を有効に活用することができ、教育課程の特例措置により、ゆとりをもった教育活動ができているということでした。また、高校受験がなく、６年間過ごせることをメリットと感じた保護者のニーズも高いようです。という訳で、このような倍率を出しているということです。一方の課題としては、中学校１年生で入学するということ、つまり小学校６年生で選択するということで、６年後どのように成長するのかは、個人差が大きい。特に中等教育学校は同じ人間関係の中で６年間生活していきますので、その人間関係が煮詰まり、不登校、転学や他の高校の受験につながる可能性もある、というお話でした。実際に、６年間いかに生徒が充実した生活を送り、その満足度を高めていくか、ということに各学校が苦心されているとのことでした。実際には、平成21年度の開校ですので、現在まだ、５年生までしか、中等教育学校としては、在籍していない状況ですので、次年度、全学年がそろい、その卒業生がでてから、検証は行っていくことになるだろう、というお話をいただきました。大変申し訳ございませんが、事務局として、こちらの学校に視察に行っておりませんので、詳しい内容については、本日福田委員がお見えになっていないので、申し上げられないところが多いかと思います。申し訳ありません。

次に資料６です。併設型の中高一貫校ということで、県内の横浜市立南高校附属中と総合学科の中高一貫校である大阪市立咲くやこの花高校と福島県立会津学鳳高校についての資料をまとめました。

大阪は、開校６年がたち、本年度始めて高校３年生まで全学年が中高一貫校としてそろった学校です。特徴としては、資料に中学校、高校の在籍生徒数がそれぞれ書いてありますけれども、中学校の入学の段階で、ものづくり・スポーツ・言語分野・芸術分野と早くから、興味関心を持てるものということで、系列を定めてそれぞれ20名ずつ、80名２クラス分を募集しているということで、中学校の特色という所に書いていますけれども、分野別学習という特色のあるプログラムを実施していることでした。また、中学校から自分の進むべき道を定めているということですので、この４分野が、高校の系列が資料に書いてありますが、ものづくり分野の生徒が、理数・ロボット工学に分かれ、スポーツ分野の生徒はそのままスポーツ系列、言語分野は言語文化系列、芸術分野が造形芸術、映像表現系列と、中学校４分野で入学して来た生徒達が、高校で総合学科の６つの系列にわかれていくとのことでした。

福島は、会津学鳳中学高等学校ですけれども、ここは開校７年目ですので、昨年度卒業生をはじめてだした学校です。中学校の特色に書いてございますが「質の高い学習指導」とともに、「キャリア教育の充実」ということで、６年間にわたって「学鳳プロジェクト」と名付けた学習が行われております。また、ＳＳＨと書きましたけれども、「スーパーサイエンスハイスクール」の指定校でもあり、高校では、選択した生徒にその授業を行います

が、中学生は全員がＳＳＨのプログラムを実施するという特徴もありました。

横浜は、昨年度から開校された学校ですので、現在、高校からの入学生が３学年在籍し、中学校は２年生までしか在籍しておりません。「豊かな人間性」、「高い学力」を掲げ、総合的な学習の時間を「ＥＧＧ（エッグ）」と名付け、さまざまなプログラムを実施しております。現在は、２年生ですので、高校に進級していく４クラスの生徒達に、「ＥＧＧ」の続きになる、高校の総合的な学習の時間をどのように行っていくのかを検討されているということでした。

併設型の中高一貫校で３校とも共通していたことは、高校の先生方が、中学生により専門性のある授業を実施できていたこと、行事など中学校と高校が一緒に行うことで、より充実した活動が行えていることなどがありました。施設についても、大阪、福島はこのために校舎を新たに建てていますし、横浜については元からある、南高校に附属の中学校を作っていますし、中学生と高校生が同じ場所で生活していますので、日常的な交流があり、高校生の進路指導の状況を中学生もさまざまな場面で目にすることがあるようで、そのような中高一貫校の良さもあるということでした。一方、生徒指導の場面や活動時間、行事など一緒に行わないものもあるなど、それぞれの段階に応じて、中学校と高校違いをはっきりと分けていることもありました。横浜はまだ２年間ですが、大阪と会津については、先生方の忙しさを課題としてあげられていましたが、子どもたちの育ちという面では、充実した教育をされているということを感じてまいりました。雑駁に説明させていただきましたが、詳しいことは、中高一貫教育について、審議していただくときに、ご質問していただければと思います。

資料７は、総合高校でのキャリア教育等の資料です。後ほど、高校から概略を説明していただければと思います。

資料８は、地域性ということで、目指す学校像の部分でお話しがありましたので、総合高校が取り組まれている地域連携の資料です。イベントへの参加や部活動単位の参加、横須賀の特徴であるキニックハイスクールとの交流、以前にもご質問がありましたが、施設の貸出など整理していただきました。

資料については、以上でございます。

安彦委員長

ありがとうございました。本日は、前半で短期的取組について、後半で長期的な取組について、審議をしていきたいと思いますが、まずはこの資料８までの全体について、事務局に質問があればお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、短期的な取組のことで、資料７、８については高校の方からとありましたので、最初に高校側から説明を加えていただけたらと思います。よろしいですか。

山岸委員

本校のキャリア教育についてご説明したいと思います。資料７が図のようになっておりますが、開校以来本校が考えているキャリア教育を中心とした「学びの構成図」というか、関係図というようなものです。真ん中の円柱の図が、１年次、２年次、３年次と上に向かっていっておりますけれども、これがキャリア教育の主な流れと捉えていただければと思

います。右側に、「自己選択・自己責任」「学力」等ありますけれども、右側に「羅針」、「羅針」、「産業社会と人間」、「特別活動」左側に「教科活動」と書いてありますけれども、こういうようなものを、お互いに連携しながらキャリア教育を進めているという考え方でおります。ただ、実際キャリア教育といいますと、「産業社会と人間」とか、「羅針」という様なイメージもあるので、このように右側に縦に書かせていただいています。「産業社会と人間」につきましては、もう１度確認で言わせていただきますが、原則履修科目と言いまして、総合学科では必ず入学年次にやらなくてはいけない科目です。ざっくり言ってしまうと「キャリア教育の授業だ」というように考えていただいてよいのかと思います。上に行くと２年次に「羅針」と書いてあります。「羅針」下に「総合的な学習の時間」と書いてありますが、「総合的な学習の時間」は学校ごとに名称を決めることができるということで、全日制では、「将来の方向性を探す『羅針盤』」から「羅針」と名付けています。ということで、２年次、３年次「産業社会と人間」でやったものを、引き継ぎながら生徒に働きかけていく、このような関係で考えています。ちなみに、「産業社会と人間」、「羅針」のところに「進路状況」だとか「啓発的経験」と書いてありますけれども、「啓発的経験」というのは、開校以来やったりやらなかったりもありますけれども、例えば、「職場体験」とか、「職場訪問」ですとか、あるいは「職業別講演会」、実際に働いている方達に来てもらって、自分が好きな所に行って話を聞くとか、「分野別講演会」、これはどちらかというと進学というイメージが強いのですけれども、専門学校や大学の分野ごとに先生方をお呼びして、ここに進むとこのようなことを学ぶのだよというような、こういう講演等を行いながら進めていっているということです。それから、左側に「相談」と書いてありますが、キャリア支援部、キャリアカウンセラーへの相談もありますけれども、学級担任、あるいは教科の先生、福祉の先生には福祉系の生徒達が相談に行くのですけれども、教員が生徒と関わりながら、進路支援、アドバイスなどをしていくというようになっています。これが、本校の体系というかキャリア教育を進めています。今、１年次で「産業社会と人間」、２，３年次で「羅針」と言ったのですけれども、具体的な、年間計画の柱になるものを、２枚目に綴ってございます。このような年間指導計画で、３年間を過ごしていっているということです。ちなみに、３年の「羅針」につきましては、半期単位ということでやっておりますので、前期で終了ということで、途中で切れております。それから、３年次の「羅針」につきましては、課題研究、大学でいう卒業論文のようなものを、自分でテーマを決めて自分で調べて、まとめてプレゼンテーションをしていくという、課題研究と従来言っていたのですが、総合学科高校は、総合的な学習の時間でこれを必ずやらなくてはいけないとなっております。最後学びの集大成的にこういうようなことをやっております。ただ、後期になりますと進路準備が入ってくるので、本校では前期集中型の１単位科目としてやっております。以上、雑駁ではございますが、このような教育活動を行っているということです。

安彦委員長

今のキャリア意識の関係でということで、本校の様子を伺いました。これは、先にご覧いただいた資料２の「目指す学校像」の（１）のところの「キャリア意識の育成」というところで、具体的にどういうことをやっているのかを、資料として出していただきたいと

いうことでしたので出していただきました。何かこの点についてご質問ございますか。私の関心としては、今やっている年間指導計画の指導体制が十分なのかどうか、どのような指導体制でやっているのかを、特にキャリアカウンセラーがいると思いますけれども、学校によってはその役割が非常に重要なのですが、本校の場合はどのように位置づけていますか。

山岸委員

基本的には、キャリア教育を推進していくこととしては、キャリア支援グループというのがございます。小野寺委員がキャリア支援グループなので、後で補足があれば話をしていただきたいと思うのですけれども、１年次、２年次、３年次の担任団には、キャリア支援グループの構成メンバーが入っていまして、そういう先生方がパイプ役となってキャリア支援グループと連携を取りながら、時には年次で要望などがあると、それぞれアレンジなどを加えながら、やっているということです。当然そこでは、前年やったことを引き継ぎながら、反省点などを伝え、キャリア支援グループがイニシアティブを取りながら次年度に繋げ、改善しながら 10 年間をやってきたという事です。それから、キャリアカウンセラーのお話がありましたが、開校の時にキャリア教育というのが１つのキーポイントと言いますか、生命線になるということで、色んな学校を視察したのですけれども、特に都立晴海総合高校でキャリアカウンセラーというのが置かれていて、非常に積極的な活動をしているということで視察にも行きながら、取り入れていこうということで本校もキャリアカウンセラーを設けました。特に、開校数年間は色々な学校の先生達が来ましたので、ある意味では工業高校と、商業高校と、普通科高校の進路指導というのはそれぞれ特徴があるのですけれども、逆にいうとばらばらの部分もあったので、キャリアカウンセラーが中心になりながら、レールを引いて行ったというような形で 10 年間作り上げていっております。ただ、ある程度レールが引かれた段階で、キャリアカウンセラーに頼った進路指導から脱却しなくてはいけないということで、今はキャリア支援グループの、進学担当、専門学校担当、就職担当それぞれが中心になりながら、学級担任と連携してキャリア教育の相談活動などに当たっているというのが実態です。キャリアカウンセラーがいるのですけれども、その人だけが孤軍奮闘ではなくて、皆さんで連携を取りながら、という形に変わってきていると思っています。そのように、キャリア支援グループが中心になりながら、年次や教科と連携を取ってキャリア教育を進めているという組織になってきています。補足があれば。

小野寺委員

いえ、特には。

安彦委員長

キャリア支援グループというのはどういうスタッフですか。何人くらいで。

小野寺委員

全体で今 15 名おります。年次から必ず出すという訳ではないのですけれども、結果的に

は、各年次より３名ずつくらい、それからその他の副担任の先生方も含めて、全年次から網羅して１つの組織になっております。

安彦委員長

15 人の中にキャリアカウンセラーが入っているのですか。

小野寺委員

入っております。

安彦委員長

現状では特に問題は起きていないですか。子ども達の間に不満があるとか、ないとか、その辺はどうでしょうか。

小野寺委員

何か分からないことがあれば、その部屋にいって、自分で調べたり、在室しているキャリア支援グループの先生に相談したり、そういうことはうまく回っていると思います。後は、個人対応の部分で先生方が支援できているかという部分で、今は確認ができていないのですけれども、この前も少しお話しましたが、クラスの担任になった時に、大学進学、専門、就職、様々いますので、その生徒達に対して、担任としては 40 通りの進路支援ができないと困るということで、担任としてはかなり調べたり、資料を集めたりという所が大変かなと思います。まず、担任の先生がありきで、それからキャリア支援グループの先生にお手伝いいただくというのが１番良いと思いますので、そういうことから言うと、２年次、３年次の先生方にはたくさん負担があると思います。

安彦委員長

そういう意味では学級担任の先生方からの声で「負担が重い」というのは出ていませんか。

小野寺委員

重いという程までやっているのかな。重いと思ってないかもしれません。自分の分からない所は、キャリア支援グループの先生にお尋ねしたり、お任せしたり、そのような感じで全体の体制を作っていっています。うまく助けていただきながら。

山岸委員

少し補足ですけれども、先ほど決めている訳ではないと言ったのですけれども、校務分掌の配置は、管理職が行います。私達は、必ず年次でキャリア支援グループが入る様に分けます。それから、学級担任はという話がありましたが、本校は担任、副担任制を取っていますので、全てのクラスに「担任・副担任」がいる、これがスクラムを組んで進路指導にあたっていきます。これは、各年次で新しく来た方には、ベテランの副担任を付けるという、補うという形で、２人で体制を組んで生徒にあたれるような、そのような配慮で「担

任・副担任」を決めており、支え合いながらやっているのが実情です。

安彦委員長

私は、都立晴海総合高校に行ったことがあり、キャリアカウンセラーのことは知っていますので、今お話があったように、都立晴海総合高校を参考にした上で、このような体制に変わってきているというお話。そういう意味で、子ども達の自己実現が今の体制で図れているかという点で、何かチェックが欲しいと思ったのですけれども、その点は今のところ大きな問題はないというように考えていいですか。比較的スムーズに行っていると。

山岸委員

進路支援のプロセスの中で、どのように生徒と関わって指導していくかということについては、みんな違うし、それぞれ、先生方の個性も違いますし、それぞれが分からなければ、キャリア支援グループに聞きながらやっているというところです。就職につきましては人数があまり多くないですから、かなりキャリア支援グループの就職担当が、中に入って、そういっても 20～30 人なので、かなり密に担任をサポートできているという、そのような体制の中では進んでいると思います。小野寺委員も、学校として１つの課題で、力を付けていかなくてはいけないなと思うのが、人数的にすごく多い進学のサポート、また色々な進学の形態であるとか、色々な学部だとか、どんどん増えてきている状況の中で、それに追いついていくように教員は研修していかなくてはいけないので、研修をしながら高めていきながらあたるということなのですけれども、結構これが大変なので、キャリア支援グループがリードしながら、慣れていない先生には支援しながらやっているというところはあると思います。

安彦委員長

あまり広げると、色々な人が関わり無責任体制のようになってしまうという心配があるのですけれども、その辺は大丈夫ですか。今のところは。

山岸委員

「産業社会と人間」と、「羅針」が週に１回。月曜日の６、７時間目にあるのですけれども、終わるとすぐに、特に１、２年次においては「産業社会と人間」の学年会、「羅針」の学年会を設けて、その日の振り返りと、次週の確認、それから、そこで出てきた質問を相談し合いながら、進めていっているので、かなり年次団としては足並み揃えてやっているとは思います。そのかわり、会議が多いという声もあることはありますが、それは必要な会議ということでやっていただいております。

安彦委員長

今のところそうすると、進学希望の子どもの対応の負担が大きいと。

山岸委員

ですから、その力を付けていただくために、研修も必要ですし、チームとしてイニシア

ティブをとるようなものが必要だろうということで、学力向上プロジェクトチームというようなものを、立ち上げてやっているということです。

安彦委員長
　他に何か、この点については。

北條委員
　キャリアについてですが、大体、この高校ではどのくらい先のキャリアを考えているのですか。各生徒がイメージしているのでしょうか。

小野寺委員
　今、１年次でライフデザインというのがちょうど終わったところなのですが、どの職業に就きたいか、そのためにはどのような大学等に行きたいのか、というように現在に戻ってくるような形で考えさせている中では、だいたいその職業に就いたらこのような事でというところで止まっています。少し前までは、もっと先まで 30 歳まで、40 歳まで考えている時もあったのですけれども、その部分が夢物語のようになってしまっていることがあったので、今年の１年次に限っては、最終的な職業までのプロセスを、今高校では何をやらなくてはいけないのかを、大学に行ったらどんなところを、仕事の学びの中で自分はどんな事をやるのか、大体年齢で言いますと 25 歳くらいまでの中で考えていた生徒が多かったです。

北條委員
　そういうキャリア教育をされて、キャリア教育は学習のモチベーションアップに繋がるものと考えてよろしいですか。考え方としては。

小野寺委員
　キャリアカウンセラー自体は、具体的な学校に関してとか、学習の面なども含めて幅広く相談に乗っていると思います。学力的なものでいうと、そのような組織的なものがなかったので、学力向上プロジェクトというものを立ち上げて、そちらで特化してやっております。

北條委員
　学力は、学力向上をサポートするということですか。

小野寺委員
　はい。

安彦委員長
　大体、間接的に内発的動機付けにはなるでしょうね。なので、小学校からキャリア教育は行いますけれども、そういう点では、子どもの意欲が起きるというのがメリットになる

と思います。

北條委員
　チェックできれば良いなと思います。

安彦委員長
　他にはどうですか。

小林委員
　この間、定時制の産業社会と人間の発表会に呼んでいただいて、出席はできなかったのですけれども、こういう発表会はどうしても時間が限られるので、全員が発表できるわけではないですよね。プレゼンテーションをやる側として、どのように選んで発表しているのですか。基本的には、全員発表できてプレゼンテーション能力を高めるというのが、１番の理想だと思いますけれども、そういうところはどうでしょうか。

山岸委員
　「産業社会と人間」と、「羅針」で多少全日制だと違いますけれども。

小野寺委員
　「産業社会と人間」の場合は、年間に発表するプレゼンテーションする機会を３回設けているのですけれども、クラスの中で必ず全員３回発表を行います。全体発表会は、クラスの代表の子が、各クラスから集まって発表する生徒を決めていますので、クラスの中では３回、１年間のカリキュラムの中で、最後はライフデザインになっていますけれども、真ん中の秋に社会人講話、５月に産業職業調べ、この３つの単元に対してそれぞれが調べたことを発表します。段階が上がっていっていますので、最後は原稿も何も見ずに自分でパワーポイントを使いながら説明するという所までが、ライフデザインに辿り着くようなカリキュラムになっております。

小林委員
　では個々では、３回は発表の場があるということですね。

小野寺委員
　生徒にしてみると、２回目の社会人講話の発表をするよりは、最後のライフデザインの発表はかなり慣れて、原稿も見ないでパワーポイントも自分で工夫したものを作って発表するというところは、達成できていると思います。２年次になると、また羅針で発表を、更に生かしていくという、段階を踏みながらの内容にはなっていると思います。

小林委員
　発表する機会があるだけ違うと思います。

小野寺委員

他の授業でも、意識的に、国語の授業であったり、私は音楽なので、音楽の歌の発表をみんなの前でするなど、結構みんなの前で発表することを、各教科の先生方意識を持っていらして、英語の時間も発表させたりであったりとか、年間の中でずっとあります。横須賀総合高校は人前で発表するのだというのが生徒の中でインプットされてきております。ですので、２年次、３年次になっても、人の前で何かするということを臆せずに出来るようにはなっていると思います。

山岸委員

３年次になると、先ほど課題研究といいましたけれども、本校、「産業社会と人間」と、「羅針」につきましては、月曜日の６、７時間目を全校で一斉にやりますので、１年次は担任、副担任が８クラスですので 16 人、２年次も同じ 16 人、残った 30 名ちょっとは全員３年次にあたります。320 名を 30 数名で見ますから１グループ 10 名くらいで分かれて、研究をさせて、グループごとで最初は発表をさせて、１回戦、２回戦ではないですけれども、それから全校発表を行いますので、３年次になると全員３回ではないですけれども、やる生徒は３回くらいやる、ただ、最低でも１回はみんなやる形ではやっております。

坂庭委員

定時制も同じで、年に１回しか発表する機会が定時制はないのですけれども、クラスごと、あるいは年次の中で発表会をもって、代表者が成果発表会をするという形を取っております。

松本委員

クラスの発表会を私は、２回ほど見たことがありますけれども、結構活発に意見を出し合ってやっていますね。１年次に発表した方が、引き続き同じ課題を持って３年次に発表をされている生徒もいらっしゃいますし、そういうところはきちっとした授業をされているのかなと思いました。ただ、ちょっと気になることを先生にお伝えしたことがあるのですけれども、将来に向かって課題を見つけてやるということなので、課題設定があまりふさわしくないような課題が中にはあるようなので、担任の先生の方でその辺の指導もしていただけるとありがたいなと思いました。もう１つは、色々なツールを使って調査、研究をされていると思いますが、その結果としてこうでした、ああでしたということをされるのですが、結果から考察をして、自分の意見はこうなのだという、突っ込んだところまでしている生徒が少ないという印象でした。

安彦委員長

３年次の全体発表を私も見ましたけれども、さすがに 10 人選ばれた生徒ですと、松本委員おっしゃったような子どもは比較的少なくて、自分の意見を言うようになっております。それは、グループの中から選ばれて来ていて、生徒達がその生徒を選んでいるみたいで、そういう意味では中々おもしろかったです。１番私が感心したのは自分のキャリアにテーマがちゃんと繋がっている生徒です。いずれ、自分がこういう仕事に就くということを念

頭に置いてテーマを選んでいる。10 人中７人か８人はそうなのです。これはとても良いことで、なかなか他の学校で、総合的な学習の時間にそういう事をやっている生徒は少ないです。普通科ではなかなかそうはいかない。総合学科だからだなと思います。その点は、キャリア教育が総合の方に生きていると思いました。

ひとまず、今伺うと、現在やられている体制でかなりのことが出来ているけれども、今後充実すべき点は、本校としては進学の方の指導体制、それをもう少し充実させないといけないと、これが出てきたかなと思います。

それでは、もう１つの地域との連携ということで、資料の４と８を合わせて、説明を高校からお願いできますか。

山岸委員

市立高校ということもあると思いますが、市のイベント等に声を掛けてもらっております。ということで、イベント等に声を掛けてもらい行く場合は生徒会の子達が行くのですけれども、資料８のようなイベントに呼ばれました。また、生徒会以外の生徒でも、今年度、８月のイングリッシュワールドは、教育指導課から小学生対象のイベントだと思いますけれどもお手伝いと言われた中では、ＥＳＳの英語のクラブの生徒だけではなく「コミュニケーション」という英語のコミュニケーションの授業ですけれども、このような英語の授業をとっている生徒達にも声を掛けて募ったところ、多くの生徒達が手を挙げて参加したとか、「世界自閉症デー」などは福祉をとっている子達が、施設に見学に行った時のご縁で、声を掛けていただいて、それでお手伝いをさせていただき、「すごく良くやってくれる」と毎年の様に呼ばれているなど、このようなことをしております。部活動も色々な所で声を掛けていただいております。美術部がよく絵を貸して欲しいと言われ貸し出したりしておりますし、一昨日、読売新聞に消防署から津波の絵の記事が出ておりましたけれども、今日も神奈川新聞に出ておりましたが、それが、資料８の［美術部］４つめの消防局のところですけれども、そういう依頼をされたり、馬堀海岸の防波堤のペイントの依頼を受けていたりもします。吹奏楽部はこれが全部ではなくて、色々なところから声がかかり、色々な地域に呼んでいただき演奏してきている、こんな活動をしております。ものつくり研究部が今年度のペリー祭で、ペリーが浦賀に来て 160 年で、黒船の山車を高校に作ってほしいと依頼され、本校旧工業高校の建築の先生がいるので、その先生達が作ってなど、このようなことをしております。それから、キニックハイスクールとは開校以来お付き合いがあるのですけれども、今年度もこのようなお付き合いがあります。今日、担当の先生が３月にソフトボール交流会をやることになりましたと言っておりましたけれども、このような交流をしております。雑駁ですけれどもこんな感じです。

安彦委員長

資料４の方は、結局、平成 20 年度から予算削減で廃止されているということで、学校開放講座というのが今は無いようですが、全体としては今、総合高校の生徒と地域の連携はかなり色々な場面であるというような様子がわかりました。そういう意味で言うと、１つは、「目指す学校像」の方は、これは議事の１ですけれども、２項目に分けた中の、資料７、８、４等、今の議論を受けて、何か修正や、ここはこうした方がいい等あれば出していた

だければと思いますが、いかがでしょうか。「生涯学習機関として」というのが、今後どうなのでしょうか。予算にもよると思いますけれども、「学校開放講座」のようなものは今後あった方が望ましいか、あればあった方が望ましいですが、そういうことを要望できるのか、要望として入れておけば機関としてというのは、割合強い言葉ですので、ちゃんと施設設備を使えるような形にしなきゃいけない、そうするとそれなりの、人員配置や、夜間使用すれば電気代等それなりにするわけですから、予算措置が伴う訳で、そういうことも今後の方向として期待したいということになるか。どうでしょうか。

吉田委員

第４回に出たものより、その時要望をさせていただいて、これは直接、小学生、中学生、保護者が見るものではないと言うことはわかっていながら、とても分かりやすくなったなという感じがしていますので、ありがたいなと思います。この事とは少しはずれますが、これは短期的なものを、お話していると思いますけれども、この後３回、26 年度会議があると、10 年を迎えて現在進行の短期的なものが、本当に不足しているものとか、予算措置が必要なものがないだろうかという事を、洗い出しをして、早急にやらなくてはいけないものがあるのではないかというのが、現場の中学校の校長としては思うのですね。それが、来年３回過ぎて、本当は今年の子ども達にとか来年の子ども達に生かせるようなものが現場から要望があるのならば、そこのところを、目指す学校像を進めながら、今委員長お話されたように、予算要望があるならば、来年を待たずに、出すとか時間的な早急というかそういうものはないのでしょうか。もしそうならば、すぐに検討して、ここで要望として出してという、スピード感が必要なのではないかと思っています。以上です。

安彦委員長

この点はどうでしょうか。事務局は。

事務局：教育政策担当　河野

短期的取り組みでは、教育委員会の方で出来ることは予算措置かなと思っています。学校の教育活動の部分については教育課程の編成権は校長先生の権限ですし、キャリア教育の充実等については学校の方で取り組んでいただくことだと思いますし、逆にそれをするために、こういうことが必要だと言うものが具体的にあるのであれば、ここで全体的な意見をいただきながら、学校と教育委員会で考えて予算措置していくことだと思いますので、お声として周りから出していただくのはいいかと思います。

安彦委員長

声を出していただくのはもちろんいいのだと思いますけれど、すぐ予算が付くという保障は全く無いもので、ここはただ声を出すだけの場でしかないなという、残念ですが。

北條委員

生涯学習機関ということなのですけれども、今全くないものを望むというよりは、今実際に高校の中でされている授業、もしくはもうちょっと今後やっていくような、もう１ラ

ンク別のものだと思いますけれども、今後やっていくものを地域の方に提供できれば、まず一歩でいいのかなと思います。今ずっと出ていますけれども、キャリアに関して、キャリア教育をやられたことの無い方も多いかと思いますし、そういう方のキャリア教育を、近くの働いている方に、例えば学校の授業に来てもらって、今出来ることから地域の方に対して学習の機会を提供できれば、１つの生涯学習機関の働きかなと思います。

安彦委員長

それでは、文言の上ではこのままで良いでしょうか。他にはどうですか。よろしいですか。後の（２）の方の文言その他についても、よいでしょうか。それでは、あまり時間がありませんので、また気がついた時に言っていただくことにして、目指す学校像については、今あがっているようなご意見を受けて、事務局の方で整理していただければと思います。

それでは、ちょうど半分になりましたが、次に長期的な取り組みについてということで、各委員からご発言をお願いします。他に資料３もございますが、資料３についてこれは報告的な資料だということで、済まさせていただきます。何かこれに意見等ありますでしょうか。先ほどお話ありましたとおり、このように報告しておりますというだけですので、よろしいですね。それで今お話がありましたが、今日資料として出しております資料５、６が中心になりますが、中高一貫の資料として、横須賀総合高校を中高一貫校にしていくというのが、長期的な選択肢の１つだというように、条件の方に入れて議論してまいりました。この点について、まずはそれぞれ何からでも結構ですので、ご意見ご発言をお願いしたいと思います。どなたからでもどうぞお願いします。

吉田委員

この委員会の中でもお話させていただきましたし、先日直接事務局の河野指導主事ともお話させていただいたのですけども、中高一貫を論議するのを中学校校長会が嫌だと言っている訳ではなく、誤解の無いように言っておきますけれども、当然論議をしなくてはいけないし、そういう時期が来ているのを、
23 校の校長がみんな認識している。この多くの方がお集まりの中で、これについて多くのご意見をいただくのは必要だと言うのはわかっています。ただ、ここで出し合ったことがイコール決定条件になって進んでいくことになるのは、私はここに代表で出させていただいておりますけれども、１代表なので、私がこれで良いとか悪いとか聞かれた場合に、中学校校長会としてＯＫとは言えない、というお話をさせていただきました。今日はいらっしゃいませんが、恐らく小学校の校長も個人的な感想等は言えても、というところだと思います。進行具合のところの確認で一言お話させていただき、その中で意見としてお話させていただきたいなと、思っているので、そういう縛りを付けないでいただいきたいです。皆さんもそのようなお考えを持っていただきたいなと思います。以上です。

安彦委員長

この点はいかがですか。前回も菊池委員の方から中学校のことについて話すというような場ではないのではないかというお話がありました。もちろん中学校のことを話す訳では

ございません。今の中学校を念頭に置いて、それを高校と繋げた場合にどうなるかということを、関係する点を話す訳で、今の中学校のあり方うんぬんですとか、そういう事になる訳ではございません。この点は中高一貫を議論する時は、今ある中学校を前提とした議論ということになります。ただ、一貫にした場合は高校側からの関係で、現実に一貫校の中学校が変わってきているという事実があります。これを議論の上では念頭に置かなくてはいけない。それは、資料等でまた中身を議論する中ではっきり見えてくると思います。まず今、吉田委員から言われた事は、よろしいでしょうか。ここでの議論というのは縛りの無いものとする、自由に意見を出していただくという、ただ、決定という訳では無い事は明らかで、選択肢の１つだという事をお認めいただいていると思いますので、そこで、この場で議論すると、選択した場合は、このような良い点がある、悪い点があるという議論が、主になるのかなと思います。みなさんからは、このような懸念がある、こうした方が良いのではないかという、自由にみなさんが今持っているお考えを出していただければいいのかなと思います。決してここで決定をするわけではないということを繰り返し申し上げておきます。あくまでも選択肢の１つというニュアンスでいいのだと思います。決定はたぶん上の方でやると思います。それでは、どなたからでも、あるいはご質問でも、資料６についていかがでしょうか。

小林委員

今色々本とか読ませていただいていて、勉強させてもらったのですけれども、うちのこの総合高校でやるとしたら、「中等教育学校」か「併設型」か「連携型」と、色々パターンはあると思いますけれども、この表等見ると、実質的には志願者も増えていて、内情は、落ち着いていていい学校になっているという評価を受けていると思います。それで小学校の立場で行くと、児童が６年生の時にその受験をするという事は、結局児童が決めたのではなく、教育熱心な親御さんが中心になって、受験をさせようという形になっていっているのではということで、子どものためのではなくて、親のための良い学校というのが中高一貫校なのかなというのが読み取れたところです。学校にしては、６年間ありますから授業の仕方もゆっくり計画的にできるし、留学をしたい場合でも１年間、２年間長くできる形はあるのかと思いますけれども、地域的にいうと、小学校でもトップの子達がそこにいって、あと残った子達の中学校になってしまうのかなと、色んな懸念でどっちにした方がいいのかというのが、あまり自分でもはっきり言えてないのですけれども。まず１番始めに、どのような形が総合高校では１番なのかなと、併設型がいいのか、連携型がいいのか、中等教育型がいいのか、というところを決めていっていかないと、その次の話が中々進まないのかなと思いました。

安彦委員長

この点についてはどうですか。今、実施形態の事で、資料の５では、完全に一貫の中等教育学校と、高校から１クラス、２クラス取るタイプの併設型、３つめは連携型と言って、現状の施設設備等はそのままで、中身の上で先生の交流や、生徒の交流という形で交流を深めていくという、３つある訳で、１番少ないのが①の中等教育学校で、③の連携型が学校数では全国的に１番多いです。それで、今１番人気があるのが②の併設型です。１クラ

ス高校入試という形で取ると、高校で外へ出て行く子もいます。

小林委員

そうですね。中学校に入って、どうしても合わない子もいるのかなとも思います。中の学力が絶対変わってくるので、トップになっていく子も色々中で出始めるのではないのかなと、懸念があります。

安彦委員長

今の３つの型について説明は、事務局から何か補足はありませんか。

事務局：教育政策担当　河野

中等教育学校につきましては、今お話をいただいたように、基本的には６年間一貫して、同じ先生方が、同じ組織の中で教育を行うということです。県については、県立の中等教育学校を２校設置しています。併設型については、安彦委員長からお話がありましたけれども、中学校から６年間の一貫教育を受けるために、併設型で中学校に入学したら、基本的には抜けるということではなくて、高校まで進んで行くことを前提に、行っています。資料にある、大阪咲くやこの花中学校・高校についても、１～２名が、外にというのはあったようですけれども、基本的にはないということで、色々な工夫を学校の中でもされていますし、中学校の時から自分が進む高校の生徒や先生方との繋がりもできてきますし、あまり多く抜けるということはないようです。もちろん、お話をいただいたような学力差の部分の悩みはそれぞれの学校が持っています。私は、中学校の教員ですけれども、それは現在の中学校でも、高校でもあると思いますので、学力差についてはどこの学校でも持っている同じ悩みだと思います。また、連携型については、全国的に見ると生徒の集まりにくい地域に連携型の中高一貫校が多いようです。連携型の中学校、高等学校ですと、施設も一体ではございませんので、中々繋がりについては、連携校ということになっているけれど、本当の意味で６年間つながる良さをと考えると中々難しいものがあるということのようです。

安彦委員長

私はもう少し色々知っているのですけれども、連携型は今お話ありましたけれども、割合、過疎化が進んでいる地域は、子ども達が全体としてその人数が減る、また外に出て行こうとする子どもが増えてくる。そうすると地域としては、子ども達を居させたいので、早くから高校までは居てもらおうという気持ちが強いので、地域の住民がそういう方へ動いていきます。ですので、地域のバックアップが強い所はうまくいっています。地域が意思統一をして、学校だけでなくて、教育委員会だけでなく、行政全体に意思が統一されているところは、連携型でも子ども達は落ち着いて色々な交流をしながら、子ども達が地域の外に出ないでよい工夫がされていて、それなりに評価はされています。この点はそれがうまくいかないところ、教育委員会だけがしゃかりきにやっているところは、地域の方は必ずしも乗り気でないのに、教育委員会だけがやっているぞということでは、連携はうまくいきません。併設型は最近増えてきていて、今お話があったとおり、６年間通してとい

うのは親としてもかなり冒険な訳でして、私は校長としての経験があるのですけれども、名古屋大学の附属中高というのは、併設型の中高一貫をやっておりまして、私の後、具体化したのですけれども、名古屋大学附属の場合は、高校に上がる時に、併設型で外から１クラス取っているのです。それが、いいのかどうかは色々議論があるのですけれど、まずは今事務局から話もありましたが、一貫ですから６年間を念頭において教育を受けるというのを、保護者からは念書を取らせていただきました。誓約をしてもらいました。そうでないと、３年間経って出られてしまうと作った意味がなくなってしまいます。まずは、誓約を取らせていただいた上で、途中から、例えば子どもが音楽の道に進みたいと言って、音楽科に行きたいというのが出てきます。そういう子の、希望、志望は無視できませんからそれは認めている。ですから、そういう例外的な措置は認めておりまして、制約は一応あるけれども、そういうケースはほとんど認めております。当初は完全に一貫として外から取るべきではないというのが、一番純粋培養でいいと言われたのですが、１クラス外から取るということは、その子達のために対応を、別途考えなくてはいけませんから、先生方は少し苦労しますけれども、むしろ外から取る方が、子ども達同士の刺激のし合いという意味では良いです。両方ともにプラスになるので、やり方次第ですが、絶対良いです。

小林委員

授業的なことも一緒にやるのですか。

安彦委員長

学校によって、ちょっと違いますけれども、名古屋大学附属の場合は全て一緒にしてしまいます。相談を受ける先生は、外からの子ども達には丁寧にしないといけないという構えはちゃんと取っていますけれども、名古屋大学附属の場合は１つだけ別のクラスにするということはしませんでした。理由の１つは、外からの子達は競争で入ってくるので、結構学力は高いです。内部の子は暢気で、６年間でと思っていますから、外からの子から刺激を受けます。なので、あまり心配はしなくていいのです。

松本委員

入れるパーセンテージは決めているのですか。

安彦委員長

それは決めていません。ほとんど外の学校へは出ませんけれどもね。今、心配があるのが、６年間やると、不登校とか、先生との絡みとか、友達が固定化するとかよく言われますけれども、事実上はほとんどないです。途中でやめる子はいますけれども、６年制だからそうなったのかというと、そういう訳ではない。併設型なので３・３で分かれていますので。そういう事にも意識はありますけれども、一貫校だからそういうことが起きているという訳ではないです。

事務局：教育政策担当　河野

今、安彦委員長おっしゃったように、大阪、会津共に、一貫生が高校まで全部そろった

のですが、入試を２回やらなくてはいけないとか、高校から入る子と、内部進学生との差について学級編成の課題とか色々な苦労があるけれども、外から生徒が入ってくることによって、本当に良い刺激になって、社会性も育ち、中からの純粋培養の生徒達が刺激を受けて、大変だけれど併設型は非常にいいですと、２校ともおっしゃっていました。

小林委員

ここに書いてあるところで、中学校と、高校の人数が違うということは、中学校の人数よりも、高校で新しく外から取るということですか。

事務局：教育政策担当　河野

大阪は 80 名が内進生で中学から上がって、80 名を外から総合学科生で取ります。ですから、内進生と、外進生からの子の比率は１対１です。会津の方は、中学校 90 名で、高校が 240 名なので外から、150 人取っています。なので、そこは学校によって、外からたくさん取る学校もあれば、横浜市立南高校のように内進生 160 名４クラスに対して、外部は 40 名しか取らないというところもありますし、そこは設置者によって違ってきます。

吉田委員

質問よろしいですか。２つありまして、この場合のこの高等学校の教育は総合学科になる訳ですか。

事務局：教育政策担当　河野

大阪と、会津は総合学科です。

吉田委員

横須賀でやる場合も、総合学科としての６年間ですか。中学校に入った時の中学校のカリキュラムというのが見えない。

安彦委員長

今、お話があったことは絶対有り得ません。中学校は義務教育で指導要領も決まっていますから、基本的に中学校は普通教育です。決して中学校まで総合学科にするとして、前に伸ばすことはできません。その点はどこも同じです。

吉田委員

もう１つは、横須賀で考えると、公立高校に中高一貫校がないもので、どことは言いませんけれども、私立の学校だと中学校から受験の所があるわけで、中学校で教育相談など、授業参観に行くと、教室が並んでいて中高一貫の子ども達が、中学校からの子と、高校からの子という中で、私立は特別だと思いますけれども、大学進学でという話が出てきています。もう１つは、大学までの一貫がある学校と、元より総合学科でいうと大学進学を目指している訳ではないので、そこで中高一貫校を目指すメリットというのは、保護者の方は、小学校の段階でどのように考えていくのかなと、総合高校の短期的な目指しているこ

とと、総合高校として中高一貫校の姿というのは違うのではないのかなと思っています。

事務局：教育政策担当　河野

中高一貫校が大学進学のための学校という捉えではないです。

吉田委員

元よりそうです。大学が一緒の一貫校は、保護者側でいうと、そういうことで選ぶことがあるのではないかと、この場合の横須賀総合高校で中高一貫をやった場合の、アピールするところというのは、落ち着いた６年間を送るというのはわかるのですけれども、どういう形で、保護者が、小学校６年生の子が選んでいくのかなと思います。小学校の先生がいらっしゃらないので、我々で言うと、国公立の中学受験、それから私立の有名高校とは言ってはいけないですけれども、そこを受験される方が、各小学校何名かいますよね。そこに、総合高校が中高一貫校として選択肢に入るのは、選択の幅が広くなって良いのですけれども、具体的に目指すものは今まで話してきた高校として同じものなのかと、それとも違う、中高一貫としての有体は違うのかなと、その辺のところです。

事務局：教育政策担当　河野

逆に言いますと、今検討委員会で検討している総合高校の目指す学校像を照らし合わせた時に、例えば中高一貫校にした時に、この学校像を実現するのにより良い手立てとなるのかどうか、ということはここでご意見いただきたいです。それから、今吉田委員が言われたような、中高一貫校が大学進学のための学校という印象を持たれているようで、確かに６年間しっかり勉強しておりますので、実際にはどの学校も進学実績は上がっていると聞きますが、それを目指して行くのかということも含めて、こちらはお話をいただきたいと思います。色々な中高一貫校は、安彦委員長の方が詳しいと思いますけれども、色々な形の中高一貫校があると思いますので。

安彦委員長

非常に大事な問題だと思います。１番大事かもしれませんが、この点は、大阪市立咲くやこの花中学校・高校と、福島県立会津学鳳中学校・高校の場合はどうなのでしょうか。

事務局：教育政策担当　河野

大阪の咲くやこの花高校の方は、早い時期から興味関心に応じた学校ということで、中学校の方は募集をしています。総合学科というところでは、系列６つということで、外部から入ってきた生徒についても、それぞれの系列を１年生の早い時期に選んで、１年生の後半から、系列に分かれてそれぞれ学習をしていくということです。咲くやこの花高校はすでに、何年間かは総合学科高校として存在していて、そこに附属中学校の校舎を作って出来た学校ですので、外から入ってきた生徒もそうですけれども、中学校から意識を持って入ってきた生徒達ですので、昨年度からの変化というと、昨年度までは高校から入学してきた生徒達だけだったのが、今年度の高校３年生からは、いわゆる内進生が入っていますので、高校からの入学者も含め、大学進学者が増えているということでした。福島の会

津学鳳についても、そこに書いてありますが、４年生大学、短期大学それから、ＳＳＨの関係だと思いますが、看護、医療、福祉系の専門学校、とそれ以外の専門学校、そして就職、海外へと、その他の未定は決まっていない浪人生も含めてだと思いますが、今年度実績もこういう形で出ています。それから、総合学科高校ですので、そこに書いてある系列科目で、芸術系列のというのを持っていますので、東京芸術大学というところにも進学しています。そういうことで、６年間しっかり育ってくれれば、先を見据えて大学を選んでいるという傾向はあると思います。

安彦委員長

ですから、学校のせいではなくて、子どもを入れる保護者の意識が変わってきて、進学志向の保護者の意向を受けて学校が対応しなくてはいけない。今の横須賀総合が直面している問題、あるいは保護者の要望に応えなくてはということでは、そちらを充実させないと、というのと同じです。元々総合学科は国が進学のために作った訳ではないですし、中高一貫も進学のために作った訳ではない。それは私立の大学の中高一貫校は進学のために作られていますけれども、そうならないようにと、国会の付帯決議があったほど、非常にタガをはめられて、公立として作られたものです。ですから作るときは、皆そのような構えでつくられているわけですけれども、だんだん保護者の意向が変わってきて、うちの子は進学させろ、進学準備の勉強をさせられないかという、そういう方向で動いてしまった。この点は余計な話ですけれども、前にも話したかもしれませんが、保護者の声を聞けって言うのが、一番はっきり出たのが、小泉さんが首相の時です。小泉さんは、言ってみればユーザー主義という言葉があるかもしれませんが、保護者は神様だという言い方で、予備校と学校を並べてどっちがいい教育をしているでしょうと、保護者にユーザーとしてどっちか選べばいいですよと、そういう対応の仕方を認めた訳です。結果としてどうしたかというと、今もお話したように保護者は予備校のような進学志向が強い訳ですから、予備校のようなことをやってくれなくては困ると、学校に言い始めたわけで、学校は、この中等教育の段階にある生徒の発達時期に、何が本当に必要か考えなくてはいけないのに、とにかく大学進学のための受験科目を教えろということで、記憶にあると思いますが、数年前、未履修問題というのを起こした訳です。本来必修科目で、高校で教えておかなくてはいけない教科の時間を使って、だまってこっそりと受験科目を教えていたと。それが発覚して、まずは富山で発覚してしまって、それで調べたら全国的に公立学校がかなりやっていたとわかった。実際それを問題視して、一部のひどいところを文科省に呼んでヒアリングをしたら、その時に、あえて一言で言えば、ほとんどが「俺達はなにも悪いことをやっていない」というのです。保護者が要求してきたことをやったのが何で悪いというわけです。保護者には、「先生方頑張ってこい」と言われて、ヒアリングの場に臨んできたのです。私は、そういうようになってしまったのが非常に残念でして、「じゃあ、あなた方は保護者が泥棒のやり方を教えろと言ってきたら、学校はやらなきゃいけないと思いますか」と言ったのです。そこで専門家としての、教育的判断が働くわけですよ。いくら保護者がやれと言っても、そういう場合は違う訳で、教育的判断が専門的に働くから、学校という場がある訳で、それが予備校と違う訳です。そういうユーザー主義の考え方は本当に広がってしまったので、親の言うことを聞かない学校はなんだという。でも、まず教育の中身を考えない

といけないはずなのですけれども、どうしてそれが必要なのかと言うと、子どものためとか社会のためとかあるわけですね、教育は。反社会的なことや、子どもの成長に反することは、やっぱりやれない訳ですよ。そこの部分がわかってないで、そこを軽んじている。俺の子どもを大学に入れろと、予備校に怒鳴り込んでくる親はたくさんいますから。予備校にまでいるので、親の意識というのを、今、いろんな意味で問い返していかないといけないと思います。中高一貫にしても国会の付帯決議まで付けて、反教育的なことが起きないようにするというのが前提ですので、その点は踏まえないといけないと思います。

田中委員

基本的に中高一貫のイメージが自分の中でなかなか浮かんでこないのですが。子どものためにいいから全国的にできていると思うのですが、実際に子どものために中高一貫にしたらこんな面があって、今の体制よりこんなところがいいよ、だから推進していくのだというものが、あるといいと思います。６年間継続して指導できるとか、進学のための試験がないので、過度の試験勉強がないとか、いろいろあるようですが、本当に中高一貫にしたときに、どういう子どもたちに対して、あるいは親に対して、このようなメリットがあるというものが、イメージ的に薄いので、具体的にこんなことがいい、だから今の３・３制よりいいよという事をイメージ的に掘り下げていって、そこでどうだろうという話かなと思います。なかなかイメージがわかないので、今の状態に中高一貫をプラスしたときに、どうなのかなあと。自分自身が理解できないので、何ともいえないのですが、もどってすみません。

中山委員

まず、実施形態の部分では、中等教育学校か併設型かという中では、県は中高一貫をやるといったときに、中等教育学校を選んだ。ところが、横浜市・川崎市は、併設型を選んだ。そこの部分の神奈川県と市のコンセプトを事務局として把握しているものがあったなら教えてほしい。また、先行してやっている公立の中高一貫校がもともとコンセプトとしては、県は４点あげているが、その４点の意義・利点は今の段階でどういう形で成果として現れているのか、まだ６年目になっていないので、県がまだでにくいというのであるならば、他県の目指すコンセプトでやっているところが、どういう６年間の育ちの姿として具体的な姿で見えているのかを資料としてだして頂くと同じ土俵で議論できるかなという思いがあります。さらに、もう１点。難しいとは思いますが、うちは総合学科でいくと決まっているのかなと思っているのですが、総合学科でいったときの中高一貫校については、あまり先行がないと思うのですが、聞きとりをしてきた中で、それぞれの学校のどのようなメリット、デメリットを捉えて、総合学科ということを考えていくのか、基礎的なデータ・資料をいただけると、同じような土俵で議論ができるのかなと思います。何か事務局でつかんでいるのであれば、出していただくとありがたい。

安彦委員長

事務局からありますか。

事務局：教育政策担当　河野

県が中等教育学校を選んだということについては、うかがっていないので、わかりません。横浜市については、市民等のご意見も踏まえて、併設型になったときいております。中学校から４クラスは６年間で、高校から１クラスをとって、今までの横浜市立南高校のよさも活かしながらつくっていきたいというようなお考えだと伺っております。川崎市については、もともとあった川崎高校に併設型の中学校となっておりますが、ここについてもお話しを伺っておりません。他県の資料については、次回までに準備したいと思います。総合学科で行うことのメリット、デメリットというところですが、多様な選択科目をおけるというところかと思います。大阪の咲くやこの花中・高等学校は中学校入学時から、分野を決めて入学しており、総合学科高校に進学した時点で、その分野に特化した科目が設定され、そこを伸ばすことができるというよさがあるかと思います。また福島の会津学鳳中・高等学校については、中学校から学鳳プロジェクトということで、キャリア教育を通して、いろいろな学びを子どもが中学校時代に体験する中で、その上で高校になって、「産業社会と人間」を外部入学生とともに学びながら、横須賀総合高校と同様にさまざまな科目を選択して学んでいくことのよさをあげられていたかと思います。横浜南については、普通科ですので、総合学科という部分でのお話しはできないかと思います。デメリットといえるかわかりませんが、中学校３年間でキャリア教育を充分やってきた生徒に対して、その取組のない高校からの入学生がどのようにキャリア教育を行い、進路選択につなげていくのかという部分の難しさはあるかと思います。

吉田委員

懸念材料ばかりを言うわけではなくて、前向きな形で検討していくべきだと思っているのですが、今、総合高校がこの先 10 年間今までやってきたことも含めて総合学科のよい部分をのばそうとしている中で、中高一貫校が、横浜南校のようにはならないでしょうが、今高校入試倍率でも１点何倍から２点何倍の中で、中学入学の倍率だけを見ると、初年度が 10 倍、今年度８倍で、横浜市は中学 147 校と私学がたくさんあるので、その中の選択として１校を横浜の小学生が選ぶのとは違うのかもしれませんが、横須賀の公立中学校 23 校で、その場合には他も受けているのかもしれませんが、この倍率が上がっていくことにより、今の総合高校が目指すものと、中高一貫校が目指すものが、さきほどの保護者の意識が高いということもあり、それだけ高い倍率で入ってくるとなると、こちらの目指すものと違ってくる可能性があるのではないかということを心配しています。実際には小学校６年生にどうやって進路指導していくのかと懸念することもいっぱいあるのですが、国公立の中学校を受ける、また私立の有名校を受ける子は主に塾等の部分で受けることが多いでのはないかと想像されます。今度は公立なのでと思っても、そのあたりどのようにバランスをとっていくのかなと思います。１回始まったらやめるというわけにはいかないので、10 年後を目指してやっていかなければならないと思うので、総合高校がこれから目指していくものと中高一貫を始めたことによりその部分が両方に悪影響を及ぼすのではないかと心配しています。そのあたりをどうお考えなのかと思います。

安彦委員長

その点は、むしろ事務局に聞いても無理かもしれませんね。咲くやこの花中・高校とか、何か情報はありますか。

事務局：教育政策担当　河野

そういう意味では入ってきた子どもたちの意識が高いということで、勉強も部活も一生懸命やるし、高校生との交流もあって、人間的に非常に育っているというお話しがありましたので、今、目指すものが変わってくるという部分で、総合高校が目指すものが中高一貫にすると、どのように変わってきてしまうと懸念されているのかを逆にここでご論議いただきたいなと思っております。

吉田委員

今の心配は大学進学率の部分で、スタートから倍率が 10 倍、８倍と人気がでたときに、難関になってくれば、進学のために入ったとは言わないまでも、保護者も子どもたちのニーズもあって、ここは総合学科でそういう高校ではないのだよって、入ってからいう訳にはいかないので、当然入試の前に小学校６年生 12 歳にそのことをわからせてから入学させるのは大変だなと思うので、進学に偏っていってしまうのではないかということの心配です。

小野寺委員

総合学科だから進学できないというのは、デメリットの部分で言いましたが、お粥学科といわれるゆえんなのですが、本校に限っては、そういうところは払しょくしつつ、就職する生徒、専門学校に行く生徒、大学に行く生徒それぞれの進路支援をするための学校なので、進学校でもないですし、進学校ではありませんということも言いきれないし、進学を希望する生徒たちへの支援は全面的にやります。結果的に進学を希望する生徒がいれば、そのことの支援はしますというだけのことなので、入ってくるときに、総合学科はそういう学校ではないのだよという部分は、今聞いていて腑に落ちないです。

吉田委員

違う意味で、そのよいところが失われていくのではないかということです。

小野寺委員

入学して、勉強して学力向上しますよね。学力を高めるのは進学するためではありませんよね。学力を高めるということは、自分の進路の選択肢が広がっていくということで、大学にいくために勉強しましょうという指導はしません。結果、高校まで来た時に大学に進学したいとなったとき、それは全力でぶつかるしかないとなります。

吉田委員

誤解をされるといけないので、総合高校はよいのです。今の形を維持してもらいたいと、思っているのです。

小野寺委員

維持できないとは思いません。

吉田委員

そう思っているけれども、中学に入るための倍率が上がってくると、今の形と違う形の保護者が入ってきたときに、そうなってしまうのではないか。あえて中高一貫をしなくても、今の形で内部でできることを高めていけばいいのにと思っているのです。

安彦委員長

それは、学校側の姿勢の問題ですね。例えば名古屋大学附属もそうですし、今関わっているのが、昔の都立大附属で、今の都立桜修館中等教育学校ですが、私も始めから斜めに見ていて心配だったのです。最初は進学志向ではないという前提でいたのですが、結果としてどうなったかというと、入ってから子どもは割合のびるのですね。入る時点で意識が高いのです。親御さんが選ぶわけですから、学区が決まっているからという何の意識もない発想ではなく、子どもに対して親も考えながらこの教育を受けさせたいというものをもっているので、進学校ではないけれど、そういう意識の高い子が入ってくるので、倍率とは関係なく、質の面ですが、子どもがそれなりに育つのですね。結果として、進学率が高くなるのですね。途中で私も何度も言い返されましたが、本人が行きたいと言っているのを、学校側としては最大限サポートするのは当然ではないかと言われました。そのレベルではその通りです。進学そのもの、受験があることが全部悪いわけではないので、弊害の方が全面に出てしまうとまずいですよ、というニュアンスで言っているのです。どうしても一般的にはそちらの心配をしてしまうので、ついそう言ってしまうのですが、結果として、子どもは進学意識も高くなり、意欲的に勉強して、進学率が上がっていくことは、私たちがとやかく言うことではないです。名古屋大学附属が最初に併設型にしたときの倍率は２～３倍です。今は８倍です。中の子どもの育ちがすごくよくて、最初は名古屋大学に入るなどということはほとんどなかったです。進学校ではなかったのです。今は中高一貫になってから意識の高い親の子どもが入ってきて、結果として進学率が高くなっているのです。実際に授業が変わっているのですね。子どもがしっかりと自覚的に勉強して、力をつけている。これは先生方の姿勢次第です。先生方が本気でどこまでちゃんとした教育をしようとしているか。進学オンリーの予備校みたいな授業ではないということが大切で、そう留意していれば問題はないです。この時期を中等教育の前期と後期というコンセプトでつかまえて、この時期の発達の子どもを最大限良い方向にのばしてあげようということが趣旨ですので、何でもかんでも大学進学、という予備校の発想とは違うということは踏まえていただきたいと思います。総合学科はそういう意味では、いろいろな子が入ってきて、いろいろな分野に行くことも望ましいですし、そういうことをじっくり中等教育で６年間やるというのは、コンセプトとしてはよいと思っています。個人的な考えですが、もし６年一貫でやるのであれば、中身の学習はやり方次第で５年でやれると思うのです。５年で基礎教育をきちんとやると、残りの１年は、のびのびと自分のやりたいこと、就職にせよ進学にせよ、伸ばす時間を与えてあげられる。余裕ができるのです。ただ、これは私

の個人的意見です。だいぶいろいろ論点が出ましたので、もう１，２点出していただいて、今後に必要な資料を出していきたいと思います。

北條委員

簡単なことですが、併設型になったときは、どこかの公立中学になるのですか。

安彦委員長

併設型はその高校の下につくるのです。そうでない場合は連携型です。

北條委員

そうすると中学１年生の通学の範囲とかはどのように考えているのですか。

安彦委員長

全学区です。つまり学区を決めていないです。通学時間で決めていることもあります。名古屋大附属は１時間と決めていました。そういう意味で、倍率が上がるのは仕方がないのです。

田中委員

横須賀市立のそういう方向性が決まったら、本当に意欲のある子が受験すると思います。素晴らしい学校になると思います。そのときにどのように選考していくのか、その方法が大変になるのかなと思います。学校自体は市立の一貫校であればレベルアップするし、よい教育ができると思います。私は賛成なのですが、地区からどうやって選考し、どういう子を入れていくのか、よほど議論していかないと、大変ではないかと思います。一貫は賛成なのですが、すごく大変な作業という感じがします。

安彦委員長

中学で選考しなければいけないのですが、このことは繰り返し言っているのですが、東京都の教育委員会が非常に不用意なことをしまして、「入試選抜」という言葉を使ったのです。義務教育ですから、絶対に使ってはいけない言葉で、そんなの建前ではないかと言われるかもしれませんが、その言葉は絶対に使えない。私学は別ですが、公立は絶対いけないのです。ではどうしたかというと、「入学者決定方法」という言い方をしました。文部科学省は非常に神経を使っている言葉なのですが、それを都教委がまったく知らずに、これを無視して「入試選抜委員会」をつくった。その委員にされたので私が注意したら、その名称を変えましたけれど、非常に微妙な問題をいくつかもっておりますので、どのように選ぶのか、どういう子を選ぶのか、学区の問題もありますから、先行しているその種の一貫校のデータを出していただくといいなと思います。

北條委員

メリットがだされたのですが、デメリットがよくわからない。それもまとめていただきたいと思います。

山岸委員

中高一貫校をこの地区でどうするかということが最初かなと思うのですが、神奈川県では３校ではないですか。この４月から川崎市が開校して４校になりますが、県が再編計画に入っていて、どうなるかわかりませんが、現在、都市部の地域で公立の中高一貫校が選択肢にないのは、三浦半島の地区だけなのかなと思っています。あとの所はだいたい通える所にある。選択肢は三浦半島横須賀の子どもたちにあってもよいのかなと思っています。ただ、それを県がやるのか市がやるのかっていう問題で、県がつくってもよいわけで、そこの所は１つの判断になると思うのです。仮に市立の本校が中高一貫校をつくるとすると、総合学科の良さが消えるかどうかと、吉田委員から先程あったと思うのですが、安彦委員長のお話しにもあったように学校の問題も結構あって、どういう力をつけさせたいのか、どういうキャリア教育をやるのかという、こういうようなことがしっかりしていれば、中高一貫校にしてもぶれないと思っています。ただシステム的に、どの規模にするのかというのは若干あると思います。例えば、４学級に１学級を高校でくわえて、５学級になるとすると、今８学級です。８学級の母集団が５学級の母集団になると教員の体制も変わってきますから、総合選択科目の数や系列の数が変わってくる。そういうところでは、影響がでてくると思っています。総合学科として今やっているこの教育が中高一貫にしたときに、同じような科目が準備できて、選択肢を用意できるかというと、一概に変わらないとも言えないかなと思っています。その辺は条件によって変わってくるのかなと思います。次回資料という話になったので、ワーキングチームでつくるときに、具体のわかりやすい資料におろしていかなければと思いますが、今言ったようなことで、多少変わってくるのは、事実かなと思います。

吉田委員

資料３に議会への資料があって、今後のスケジュールに第６，７回までこの会があると思っていいのですかね。今日この中高一貫についての話がありましたが、今後この話はどのようなスケジュールで話をしていく予定なのでしょうか。個人的には、いいスタートをきらないといけないと思っているので、ただ中学校の校長会は３月で終わりましたので、次は４月の報告で、私の言い方を間違えると中高一貫に対しての誤解を生んでしまうといけないので、ぜひ、中学校や小学校の校長会に話をしていただいて、校長会の意見はどうやって反映できるのかなと。市や県が決めたらそれについては、意見が言えないのかなと。あとどのくらいこの会で中高一貫の話ができるのかということと、実際にこの先に進むときのスケジュールを教えていただきたい。

事務局：教育政策担当　河野

まず、この会議の内容の部分では、状況によっては、第８回を開催させていただきたいということです。その予定の中で、答申をいただきたいということが１つです。もう１つは、この先の部分ですが、答申をいただいた中で、教育委員会として、今後その方向性を定めていくことになります。ですから、今回もいろいろなご意見をいただきましたが、次回もいろいろな角度からご審議をいただいて、メリット・デメリットを出していただきた

いと思います。また、県としては、横須賀市が中高一貫について検討している中で、県が横須賀の動向を捉えずに進めることはないであろうし、県の中等教育学校の成果・課題の検証を今後していくのであろうと思います。従って、横須賀市が中高一貫校を設置することについてのご意見をこの検討委員会でいただき、その答申に基づいて、教育委員会が方向性を定めることになると思います。校長会からは、市が中高一貫校を設置するということについて、どのようなお考えをお持ちなのか、メリット・デメリットをだしていただき、吉田委員を通してこの会に反映していただきたいと考えております。

吉田委員

では、意見は吸い上げていただけるということですね。そのもととなるアンケートのようなものをとってもらえるのですか。

事務局：教育政策担当　河野

では、アンケートについては、吉田委員と相談させていただきますが、この会で校長会の意見は反映させていただきたいと思います。

吉田委員

この会以外には、意見を反映させる場はないのですね。

事務局：教育政策担当　河野

実際に、答申をいただいた後で、教育委員会で、中高一貫校を設置するとなれば、その規模やスケジュールなどいろいろな検討事項がでてきます。そこについては、また別途検討になります。

吉田委員

では、準備委員会的なものができるのですか。

安彦委員長

次の段階としては、多分、設立準備委員会ができるのでしょうね。

吉田委員

それがこの答申で決まってしまうのですか。これは、長期の目標として、７年後だったものが、５年後になるとかそういうものなのかと思っていました。短期のものはすぐにとりかかるのでしょうが、長期についてはどうなるのですか。

事務局：教育政策担当　河野

これは答申ですので、予算の裏付けも含めて、答申でいただいたものをもとに、教育委員会として今後どうしていくのか、決めていくものです。

吉田委員

中高一貫もこれで進んでいくならば、ベースに載るということですか。

安彦委員長

われわれは答申するだけで、そこから先、どれほどの重みで、どれほどの予算をつけてやるのかは、行政が決めるものです。我々は意見を出すだけです。もし、校長会でご意見があれば、意見をまとめて、資料で出していただければと思います。私たちもよくやりますが、中教審に、団体の立場で自分たちの意見として、学会等から意見書といったものを出します。そういうものは、拒まないはずです。

事務局：教育政策担当　河野

ぜひ、そのような形でお願いいたします。

吉田委員

小学校にも今の話はしておいてください。

事務局：教育政策担当　河野

はい。

安彦委員長

それでは、そろそろ時間ですので、切らせていただきます。次回また、継続ということで、今まで出していただいた意見、さらに必要な資料を次回準備して、審議を進めたいと思います。中高一貫についても、選択肢の１つとして出すということです。

それでは議事の１，２は終わります。それでは、「３　その他」に移ります。事務局からお願いします。

事務局：教育政策担当　栗野主査

それでは、連絡事項などについて、ご説明いたします。まずは、追加意見の送付についてです。先ほど委員長からもお話いただきましたが、本日出せなかったご意見などにつきましては、３月 14 日（金）までに、メールにて、事務局までご送付いただければと思います。追加でいただいた意見につきましては、整理したうえで、各委員に情報提供させていただきます。

次に、会議録についてです。会議録につきましては、作成でき次第、確認用のものを送付させていただきます。内容をご確認いただき、修正がある場合は、送付文に記載の期日までにご連絡ください。確認出来ました後、ホームページと市政情報コーナーで公開いたします。

最後になりますが、次回会議の開催予定です。第６回の横須賀市立高等学校教育改革検討委員会は、５月１日（木）午後１時 30 分から、今日のこの場所と少し離れますが、横須賀市役所３階Ａ会議室で開催する予定となっておりますので、ご出席のほどよろしくお願いいたします。

安彦委員長

ただいま事務局から説明がありました内容について、ご質問がありますか。ないようですので、議事の３「その他」については、これで終了とさせていただきます。

全般的に何か質問などはありますでしょうか。それでは、これで第５回の横須賀市立高等学校教育改革検討委員会は終了させていただきます。